

南九州の山旅 その1 尾鈴山

鈴木君から開聞岳に登るとの連絡を受け、これまで東北の山旅でお付き合いしてもらっていることもあり、同行することにした。開聞岳はかなり以前に既に山頂を踏んでいるので、さほどに登りたいとは思わなかったけれども、この機会に尾鈴山や、ひと月ほど前に山頂を踏んだものの天候不良のため期待した眺望を拝めなかった鹿児島の名山・高隈山もセットにした“南九州の山旅”として同行を提案した。残念ながら鈴木君からは尾鈴山と高隈山に関してはほとんど無視に近い反応しなかった。どうも“ぼちぼちうんちく”という御仁は、含みのありそうなハンドルネームのわりには日本百名山しか興味がないようである。こまったものだ。

まっ、それはともかく、八代ドッペル登高会の吉川満氏の名著「九州の沢と源流」（葦書房、1987年）では尾鈴山について「九州脊梁山地の東に独立した山塊…、秀麗な山体…、渓谷は深く、沢登りの対象となるものは…甘茶谷、…」と気になるキーフレーズが連なり、かねてから惹かれていた。



尾鈴山甘茶谷瀑布群の一つ岩見滝の淵

難しい登攀技術を求められるようなことはともかくとして、今回の登山前半の林道歩きは、甘茶

谷一帯の尾鈴山瀑布群を眼下に見下ろすことに主目的があった。「花崗岩の谷には滝が多く、明るい南国の太陽の光を浴びての遡行は、水線に沿って山頂へ向かう楽しさを満喫できる」と何とも魅惑的な言葉が続く。来夏あたり大分緑山岳会の仲間を引き連れて楽しみたい、今回はその偵察行という位置づけでもいいか、との思いであった。



次郎四郎滝



さらに上流へと瀑布群は続く

尾鈴山瀑布群の探勝も今回登山の主目的の一つだったから車は尾鈴キャンプ場（標高約 400m）に置き、そこから登山口まで約 4km の車道歩きは、右手眼下の溪谷（甘茶谷）を見下ろし探勝しながらの 1 時間少々。それにしても林道の荒れ方は想像していた以上だ。一昨年は桑原山七年谷林道で、昨年は傾山山手本谷林道で、ゲリラ豪雨による林道崩壊のすさまじさを目の当たりにしたが、ここはそこまではないにしても相当な荒れようだ（四駆なら通れなくはなさそうだが）。



尾鈴山登山口に至る荒れた林道

ところで、尾鈴山登山では一般的なこともかもしれないが通常、登山口から山頂まで直登しその足で矢筈岳まで縦走して矢筈林道を下って登山口に戻る、というのが“尾鈴周遊道”として一般的のようである。尾鈴山直登コースに至る林道分岐でうっかり左手の矢筈林道に入ってしまうとすぐにそれと気づいたものの、一人歩きの気まぐれ故か、そのまま林道を進みゆっくり歩きながら展望を楽しむのも悪くない・・・そんな思いで結局、キャンプ場から7km近く標高980mの周遊道矢筈登山口まで歩き、逆周回することになった。



樹林帯の中、矢筈岳への緩やかな登り

矢筈登山道から矢筈岳のコルを経て尾鈴山山頂(△1405.2m)までは灌木帯で眺望はほとんど利かないが、落ち葉を踏みしめながらの味わいのある登山道が続き、1200～1300m 稜線にはブナの巨木やヒメシャラなどが目を楽しませてくれ、山行の序盤・林道沿いの溪谷美も含めて、かねてからこ

の山に持ち続けていたイメージどおりの山であった。



稜線上のブナの巨木など、その向こうにかすかに見えるのは左・尾鈴山、右は万吉山か

脊梁の奥深い山、しかも平日の登山、登山口に至る林道の荒れようからして、最近特に人見知りが増した“気まぐれ編集長”は、誰に遭うこともなく眺望の利かないだらけの山頂を独り占めにできた。ところが、風が舞う音が静寂さをかえって感じさせ、脊梁を代表するこの山の期待にたがわぬ寂寥さというか得体のしれない寂しさに急に襲われ、静かな憩いのひと時よりも早くこの雰囲気から解放されたい気持ちになり、そそくさと下山の途についた。



山頂の祠

山頂には倒木に埋もれかけた祠と、“尾鈴神社”と書かれた鳥居があるのだが、入り口が直登コースを向いているため、矢筈岳方面からの逆周回だとすんなりと判りづらい。丁寧に手を合わせて急

傾斜を下っていった。一合刻みの標識もあり登山道は良く整備されていた。午後4時前に出発点のキャンプ場に着き、日暮れまでの時間を逆算して間に合いそうなので尾鈴瀑布群のもう一つの名所“矢研ノ滝”を足早にピストンし8時間あまりの尾鈴登山を終え、次の目的の山・高隈山、というか大阪港から航路鈴木君の上陸予定の志布志港へと車を走らせた。



尾鈴山山頂傍らの祠・・・倒木が覆いかぶさり苔むした様子が何ともうら寂しい。写真2：矢研(やとぎ)ノ滝・・・キャンプ場から20分ほど。高距73m。この滝に至る遊歩道は九州自然歩道でもある。

(コースタイム) 12/11 尾鈴キャンプ場(標高400m) 8:05 → 尾鈴山登山口林道分岐(標高740m) 9:20 → 矢筈岳登山口(標高980m) 10:05 → 矢筈岳北峰(標高1350m) 11:25 → 長崎尾(△1373.4m) 11:42 → 尾鈴山(△1405.2m) 13:01 → 尾鈴山登山口(770m) 14:20 → 尾鈴キャンプ場 15:44 → 矢研ノ滝(標高480m) 16:02 → 尾鈴キャンプ場 16:20 移動距離: 19.5km、累積標高差: 1300m、所要時間: 8時間15分



南九州の山旅 その2 高隈山

松田さんの「こころの山、ふるさとの山」と言えば高隈山・・・私は会社を退職したこの春頃までは、仕事から鹿児島へはたまに出かける機会があった。そんな時まず目に飛び込むのは桜島山、そしてその傍らに桜島山の引き立て役のように何となくひっそりと佇む山の連なりが高隈山(高隈山地の総称)だ。桜島山の印象が強烈すぎるから、その分だけ影が薄いとも言える。おゆびにすと第4号の松田さんの記事を拝見して以来、少々気になって(鹿児島は遠すぎるので)出張の折にでも登ってみたいと常々思っていた。ただ、南国鹿児島のことからこの山は登るとすれば冬、と勝手に思い込み鹿児島の知人に様子を窺うと、「北西の風がもろに大隅半島に流れるから灰まみれになるぞ!」と脅され、躊躇しながら何となくずるずると宿題を先送りにしていた。

で、その最初の機会は大分緑山岳会の11月定例山行というかたちでやってきた。11月23日(土)早朝4時に大分を発ち、それでも高隈山地の南端に位置する御岳の登山口を歩き始めたのが午前10時。遅い時間のスタートで、しかもあいにくの天候不順の中だったから、御岳を経由してそれこそ駆け足でどうにか大篳柄(おおのがら)岳山頂を踏んだものの期待した眺望にはまったく恵まれなかった。このところ薩摩が縁遠くなっている松田さんにお見せできるような写真の一枚も撮

れなかった（この山行の様子は下記アドレスからダイジェスト動画として観ることができます）。この時は、鹿屋市内の民宿「しろみず」の焼肉料理や薩摩焼酎で盛り上がり、定例山行としても同行した仲間と来年の再訪を誓い合ったところである。

ところが、この山への次の機会は意外に早く訪れた。尾鈴山の記事で紹介したように大阪の鈴木君の開聞岳にお付き合いする際、せっかくだからとこの山も計画に入れた。時間が遅くなるから眺望が一番期待できる御岳だけでも、との提案だった。

尾鈴山を終えて車を飛ばし志布志港に着いたのが夜の１０時。広々とした、異様に静かな暗い港を避け、近くの道の駅で車中泊して翌１２日８：５５にフェリーさんふらわあから降り立ったうんちくくんを出迎えた。

「せっかくなら最高峰の大篋柄岳の山頂を踏みたい」とのうんちくくんらしい反応に、移動の道中に急きょ、登山口は大篋柄岳をほぼ直登する峰越林道コースとした。



高隈山峰越林道コースへの途上、山頂付近がわずかに雲に覆われた主稜線をバックに、久々の九州入りでテンションが上がっている鈴木君



左；中央はオノガラ沢で右岸の尾根筋が峰越コース、右上；山頂付近の展望、右下；志布志港から鹿屋市に至る国道付近から遠望した高隈山地

12月12日 晴れ。 峰越林道コースは登山口の標高が約300m。現在は砂防堤工事のため駐車は不可で、徒歩5分ほど手前、工事現場道路わきに許可をもらって車を停めた。歩き始めてすぐに谷（オノガラ沢）を横切るところまでがちょっとした難所で油断禁物。設えられた沢山のロープのお世話になった。あとは急傾斜ながらも樹林帯の快適な一本道。東登山口からの登路と合流する辺りまで標高差にして800m以上だから結構足にきた。その後は緩傾斜の稜線。両側は背丈以上のスズタケが覆いかぶさるが、青竹はごく一部で山頂が近づくとつれてほとんどが枯れ竹だ。



左上；南国特有の照葉樹林からのスタート、右；中腹から大隅湖を見下ろす、左下；山頂付近の枯死したスズタケの間に行く・・・スズタケ枯死は病気でも何でもない。タケ・ササ類は一定の栄養繁殖期間が過ぎると世代更新のため開花して群落としての一生を終えるが、種子は残り生命は存続していく。竹林を生業としている林家・農家にとっては

死活問題だから“開花病”と呼んで問題になることも。開花は一説には60年周期とも言われている。

スズタケ枯死の事情は祖母傾や大崩と同じで、そうであれば、ここら付近一帯では数年もすれば枯れ竹は早晚朽ち果ててしまい見透しが良くなるかもしれない。ちなみに大篋柄岳の山名の由来だが、クマザサやスズタケを意味する「篋」にあるそうだから、眺望を阻むスズタケあっての大篋柄岳ということなのだが…。そんなことを考えているうちに歩き始めて2時間20分ほどで山頂に達した。



山頂からの展望など

私はいつものことながら、この山域についての予習らしい予習は大してしておらず、人づてにこの山系の眺望は御岳が一番で大篋柄岳のそれは今ひとつと聞いていた。なるほど山頂からは南方、錦江湾の眺めが良いはずの御岳は妻岳などの主稜線に隠れて見えず、眼を西に転じても錦江湾は薄茶色の靄の中からかすかな光の反射程度。それもそのはず、桜島が思いもかけない方向から現れた(単に方向音痴?)のを観て、薄茶色は噴煙だったのだと納得。この時期北西の季節風が無ければ、この山頂から午後の日差しを反射して眩しい錦江湾が西方にもっと鮮明に見えたであろうに…残念。「大篋柄岳の眺望は今ひとつ」は訂正しなければ。



桜島山の小爆発。噴煙はみるみる高隈山上空方面に拡散

折しも、遠望していた桜島が突如小爆発を起こし、濃い焦げ茶～黒色の噴煙が見る見るうちに膨れ上がって次第に高隈上空に近づいて来た。わずか7,8分の間の出来事だ。鈴木君は、鹿児島上陸当初こそ「高隈なんぞ聞いたこともない」という気持ちが見え隠れしていたが、ここに来て、桜島山の小噴火を目の当たりにして圧倒されたようだ。そりゃあそうだろう、日本百名山でこそないが何と言っても幕末明治の大変革の時代も含め過去も現在も今後もずーっと薩摩隼人の精神的支柱でありつづけるのだから、桜島山は、高隈山は、そんな桜島山を遠望する格好の位置にあり引き立て役としても申し分なく、それだけでも十二分に存在意義があるのだ・・・納得。

一応マスクは持参したものの、噴煙の“へ”に直撃されてはかなわんと、そそくさと山頂をあとにした。

(コースタイム)峰越林道工事現場 11:04 → 登山口 11:09 → オノガラ沢渡渉 11:18 → 大篋柄岳 13:22～15:24 → 峰越林道工事現場 15:24



33年前指宿トライアスロン前日に高瀬と既に登っているが、その時の印象は頭にかすかにしかなく、あらためて読み返してみても今回の登山と比較してみても、キャンプ場がオープンし日本百名山ののぼり旗が立つなどで山麓がにぎやかになったこと、登山道の標識が整備されたことなどを除けば、印象に当時と大差はなかった。それならば、わざわざ大阪からこの山を登ることを目的に訪れた鈴木君の私とは視点を変えた印象記などに期待しよう。

南九州の山旅 その3 開聞岳

前日鹿屋市内の民宿にて

高隈山下山後の宿は鹿屋市内の前月にもお世話になった民宿だ。電話で予約した時「前は焼肉だったから今回はしゃぶしゃぶにしますか」と宿のおかみ。「ではそれをお願いします」と私・・・鈴木君には「今宵は薩摩黒毛和牛のしゃぶしゃぶ食べ放題だぞ」と期待を持たせた。

で、宿に着いてみると“茶豚豚”と呼ばれる、なんでも鹿児島特産お茶っ葉を食べさせた豚ということで、これはこれで高級な豚肉で脂身と程よい甘さとコクがあり美味しかったけど、黒毛和牛のしゃぶしゃぶを期待していただけにちょっと肩透かしの感無きにも非ず、というところだった。



開聞岳登頂

南九州の山旅 3日目 12月13日は、フェリーで大隅半島から薩摩半島山川港に渡った。開聞岳は

ところで、1000mにも満たない開聞岳を日本百名山に選定したのは、著者深田久弥が終戦後抑留生活を経験しているからに他ならない。著者のみならず当時、多くの抑留生活者が引き上げの際、内地に帰ってきたことを実感するのは船上から開聞岳が目に入ってきた時だったろう・・・その時の思い入れを込めての百名山選定だったと著者も記述している。それを書くなら合わせて、知覧から飛び立ち洋上に散った若き特攻パイロットが離れ行く開聞岳を振り返りつつ様々な思いを断ち切っ

たであろうことも、触れてほしかったなあ。

「帰るなき 機をあやつりて 征きしはや 開聞
よ 母よ さらばさらばと」

（コースタイム）かいもん山麓ふれあい公園駐車場 10:27 → 登山口（二合目）10:34 → 山頂
12:57～13:20 → かいもん山麓ふれあい公園キ
ャンプ場 15:27（テント泊） 2019 年 12 月 11～
13 日の山旅 メンバー：挟間、鈴木